2024 年 11 月 30 日発行

いのち・未来　うべ通信 31 号

わたしたちは原発のない安全な未来を
子どもたちに残すことを願って活動しています

〒755-0029　山口県宇部市新天町 1 丁目 2-36
宇部市民活動センター「青空」内 TEL 080-6331-0960 (安藤)
ブログ：https://blog.goo.ne.jp/nonukes2013

最良の避難計画は、原発も核施設もないこと

いのち・未来　うべ代表　岡本正彰

私は訴える　核施設はいらないと
事故が起これば逃げられない　障がい者は
避難計画という名の　屋内退避を突き付けられる
私は訴える　原発なんてごめんだと
事故が起これば　置き去りが
避難計画なんて　生きられない
訴えることで生きられるなら　訴えることは
生きるあかし　私は訴える

（上関原発を建てさせない山口大集会 2025 を前に）

～　目次　～

最良の避難計画は、原発も核施設もないこと　・・・ 1
戦争と原発　・・・ 2
油谷農業小学校(耕人舎)のきのう・けふ・あした　・・・ 4
過去から現在そして未来へ　・・・ 6
お知らせ、編集後記　・・・ 8

原 発 と 戦 争

前田恵子

原発は自国へ向けられた核兵器

『原発を並べて自衛戦争はできない』という小冊子を目にしたのは 2007 年のことであった。著者は山田太郎氏、元原発技術者で東電福島原発建設にも関わった小倉志郎さんが自責の念を込めてペンネームで書かれた本だった。内容は「日本の原発は平和的な国際環境を前提にして立地されている。日本を攻撃する国ができれば、その前提は崩れる。地震国に 55 基もの原発を立地している日本の原発は、軍事的な攻撃に対処できない」というものであった。そして身近な人に伝えて欲しいとして以下の 2 点を挙げている

・A　原発に対する武力攻撃には、軍事力などでは護れないこと。したがって、日本の海岸に並んだ原発は、仮想敵（国）が引き金を握った核兵器であること。

・B　一度原発が武力攻撃を受けたら、日本の土地は永久に人が住めない土地になり、再び人が住めるように戻る可能性が無いこと。

とある。

ロシアによるウクライナ侵攻でもザポリージャ原発が軍事攻撃のために占拠されたりと、世界中が恐怖に慄く状況は周知されていると思う。

そして 2011 年の 3.11 東日本大震災の際に露見したのは、「原発が危険なのは稼働時だけではない」ことだ。稼働を停止しても核燃料を冷やし続けなければ暴走してしまい、水素爆発して自らを滅ぼす。そして周囲に重大な放射能汚染を起こすという事実だ。

これは原発技術者だけではなく、軍事の専門家も指摘している。アフガニスタンで軍閥の解体や武装解除を行い、防衛大学校で教鞭も執っていた伊勢崎賢治氏は「海岸線に建設されている原発はハラワタをむき出しにしたボクサーと同じ。極めて脆弱で軍事力で守れるようなものではない。大がかりな軍事力ではなく、例えば小規模なテロリストによるテロでも、制御システムが破壊されコントロールできなくなれば未曾有の災害になってしまう怖れがある」と訴えている。

有事に備えて軍備を増強し、憲法を変え、交戦権を認めろと主張し、ミサイルや戦闘機を買い込むことを声高に叫ぶ政治家たちは、この問題に表向きには触れない。人々が気づくことを怖れているかのようだ。原子炉の構造体としての強度はなかなか強いということだが、電源喪失はささいなイレギュラーでも起こり得る。3.11 の過酷事故を経験した私たちは、この問題に真摯に向き合う政治家を選ばなければならない。

原発は核兵器製造の手段

そして「原発と戦争」というテーマを考える時に最も根源的な問題は、そもそも日本が原子力政策を進めたのは核兵器製造のための手段としてということだ。

1969 年外務省外交政策大綱の企画委員会には「当面核兵器を製造しないが、製造のための経済的・技術的ポテンシャルは保持、国民に知られないようにする」とある。現代に至るまで、もともと国民に知らされないように始まった意図が完全に払拭されたわけはない。表面上は非核政策をあげていても「安全保障に資する」という一文を原子力政策に紛れ込ませたりしているのだ。

石破茂首相に至っては、かつて「核兵器が短期間で製造できるという技術を持つことが抑止力になるのだから、原発をやめることはない」と発言している。「潜在的核武装能力の保持」を何としても捨てないという政治の醜悪な執念を感じる。経済的にも破綻している核燃料サイクルに固執するのも、プルトニウム製造という技術の保持を手放したくないためなのであろう。

原発維持ため、姑息な資金調達
電気料金上乗せ

また、今後政府が進めようとしている原子力政策を続けていくためには莫大な費用が掛かることが予想されている。経済産業省は、巨額にのぼる原発の新設・増設の建設費や維持費を、稼働前から電気料金に上乗せできる新制度（RAB モデル）の導入を検討していると報道があったが、これには私たちが大きく反対の声を上げてやめさせなければと思う。こういう姑息な手段を使わなければ資金調達もできないのが原子力政策の実情なのである。

原発事故は、住民が避難する権利を奪う

そして 11 月 9 日、耳を疑うような報道があった。青森県の東通原発が重大事故を起こしたという想定下での訓練ということだが、交通規制の訓練だとして、半径 5～30 キロ圏内から避難しようとする住民に対して引き返させ屋内待機をさせるというものだ。危険な状況から避難する権利も奪うような発電所はあってはならないのではないだろうか？重大な放射能漏れが起きた時にどのように救助や支援を受けることができるのか？2011 年 3.11 の福島での被災時に放射能汚染のため立ち入りが禁止された事実を私たちは忘れない。今年 2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震被災者への対応を見ても、適切で迅速な対応は望めないだろう。原発が立地するような過疎地の人間は見捨てられるのではないか？というのが正直な感想だ。

このように「原発と戦争」というキーワードで共通するものと言えば、「人権侵害と真実の隠蔽がはびこる社会」が思いつく。

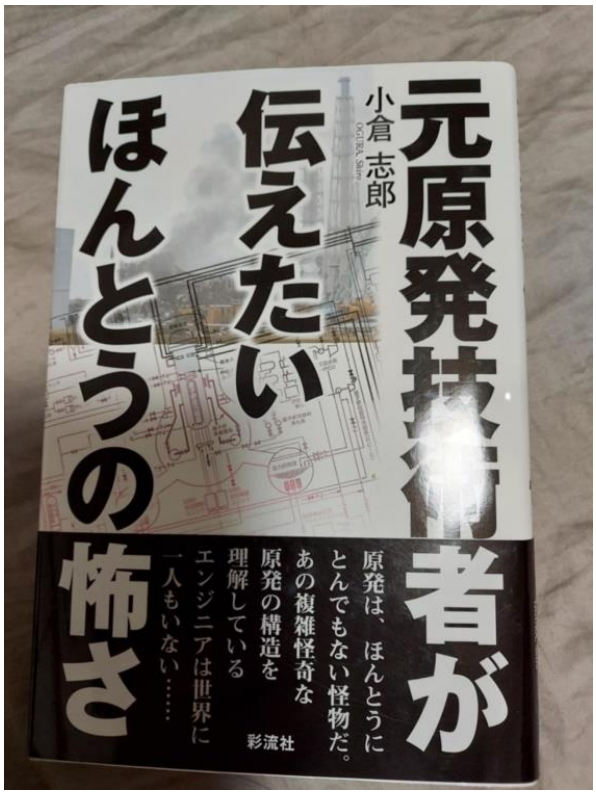
原発と戦争は共に生き物にとって害を及ぼすものであること、生きる権利を奪い、真実を隠さなければ成り立たないシロモノであるということを私たちは肝に銘じたい。そして隠蔽の必要がない、自由で生命と人権を保障された社会の実現を目指したい。

参考
原子力基本法

（基本方針）

第二条　原子力利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする。

2 前項の安全の確保については、確立された国際的な基準を踏まえ、国民の生命、健康及び財産の保護、環境の保全並びに我が国の安全保障に資することを目的として、行うものとする。



油谷農業小学校(耕人舎)の
きのう・けふ・あした

安岡正彦

油谷保養キャンプの今まで

2013 年夏から油谷で保養キャンプを開始して 12 年が経過した。この間、保養施設(耕人舎)建設、コロナ禍、肉親葬儀などでの中断もあり、わずか 7 回の実施に留まっている。個人が主催する最大 3 家族までの、吹けば飛ぶような日本で一番小さな保養キャンプだ。

しかし、様々な保護者や子どもたちとの出会いを通して福島の現状や悩みが少しずつ分かってきた。 油谷では戸外で安心して洗濯物が干せる。公園で砂を触っても子どもを叱らなくてすむ。雨に濡れても心配しなくてもよい。保養キャンプ後の尿検査ではセシウム値の軽減がみられることなどをお母さんたちが口々に語ってくれた。

子どもが成人して、なぜ福島で自分たちを産んだの？と、もしも問われたら切ないので、内部被曝を避けるため夫婦でできる限りの努力はしたいと語るお母さん。夏休みをすべて活用し各地の保養キャンプのはしごをするお母さん。イタリアでの 40 日間保養キャンプに小学校 2 年生で単身参加した男の子。人見知りのわが子のために子ども食堂を始めたお母さん。自宅の除染作業に手抜きがないよう業者を厳しく監視するお父さん。DV 被害で苦しむお母さんや子どもたちの避難場所を作ろうとしているお母さん。この 10 年間を振り返ってみると、出会った福島の方々から、困難から逃げずに立ち向かう勇気とパワーをぼくの方が一方的にもらい続けてきた。

今年、保養キャンプを連携して実施してきた団体が解散し、保養キャンプもやめた。おまけに福島で毎年行われていた保養相談会（ほよーん）も行われなくなった。

福島の実情が知りたくなって 12 年ぶりに福島を訪れた。まず相馬市の「おれたちの伝承館」を訪ね、アートで福島の被害を記録し、はね返す力を表現する試みに心打たれた。ぼくの刻字も寄贈させてもらった。ここで出会った方々から、自力更生のための試みの数々を教えていただいた。琵琶湖から始まった資源循環社会をめざす「菜の花プロジェクト」は、相馬市でも広がりを見せている。ぼくも、さっそく菜種油づくりにも着手してみたい。保養キャンプに参加してくれたお母さんたちとも福島市でお会いできた。DV で家庭内で息を殺して生活している子どもたちのつかの間の息抜きの場として、油谷の耕人舎を利用させてもらえないかとの重たい宿題もいただいた。最後に、「日々の新聞社」にお邪魔した。最終紙面編集で多忙を極める中、いわき市の現状や保養キャンプの持ち方についても相談に乗っていただいた。ぼくの保養キャンプは、「日々の新聞社」訪問から始まった。2013 年夏いわき市の保養希望者を募り、選抜してくれた。

これからの油谷保養キャンプのあり方

10 年経過したぼくの保養キャンプは、考え方もスタイルも一新して新たに出直そうと思う。

一つの大きな反省点は、保養キャンプを最も必要としている人々は誰なのかという視点がなかったことだ。住民運動交流誌月刊「むすぶ」に掲載されていたのは、避難所の中で「障害」児・者やその家族が居場所がなくてどれほど辛い思いをし、右往左往してきたのか、そしてその疎外感は今もなお続いていることの報告だった。小学校教員時代、「共に生き共に学ぶ」をスローガンに、

普通学級で自閉症やダウン症の子どもたちと楽しく過ごし、学ばせてもらってきたのに、このありさまだ。

小さな保養キャンプの利点を唯一挙げるとしたら、小回りの利く対応が柔軟にできるということだと今頃気づいた。ぼくの所では、「障害」をもった子どもたちの保養キャンプこそをメイン活動に据えていきたい。

あわせて、福島のお母さんから提起されている、学校や家庭からはじき出されている子どもたちの居場所として耕人舎を活用したい。まずは地元山口や北九州で募集してみたい。農作業や工作、音楽活動を通じて、さまざまな人との出会いと学びの場として活用していきたい。

小さな閉鎖空間の学校なんかで思い悩むより、透明で透き通った空気と風を感じながら、食物を育て、調理し、素敵な大人たちとの出会いのなかで豊かな魂を育んでいってほしいと願っている。耕人舎が何かの一助になれば幸いだ。

保養の拠点、耕人舎

2018年8月　ぼくの畑で栽培したスイカをみんなで採って、油谷の大浜海岸でスイカ割り

過去から現在そして未来へ(1)

西村 誠

私たちの住む宇部、過去には公害を克服した歴史があります。それは石炭という自然の恵みをいかに取り扱ってきたかによります。

宇部で石炭が採掘されるようになったのは江戸時代からといわれています。そして明治時代に入ると、産業の発展とともに石炭の需要が拡大し、注目されるようになってきました。当時石炭を掘る権利が、宇部以外の人たちに流れようとしていたのを食い止めたのは、旧領主だった福原公をはじめとした人たちでした。彼らは私財を投げうって、その権利を買い戻し、それを受け継いだ人たちが各所で中小の炭鉱を設立し、石炭を掘り始め、その権利を共同管理し、収益を街づくりに活用していきました。これらをまとめてきたのが、渡邊祐策を中心とした炭鉱主たちでした。需要の増す石炭需要に対応すべく生産も増加し、企業と地域が共存し同じように栄える「共存同栄」を合言葉に、地域のインフラ生活に必要な施設の整備に尽力し、鉄道、学校、病院等々が作られ、市民の生活向上に寄与してきました。

そして掘り続ける石炭は有限、掘り尽くせば子孫の代には何もなくなります。有限の鉱業から無限の工業へと手を緩めることなく、渡邊祐策を中心に鉄工所、セメント、化学工業などの会社を次々と設立運営してきました。次の世代を見据えたこの考え方が、国内で同時進行してきた炭鉱で栄えた地域と違う点です。卑近な例を挙げると、筑豊炭田地域、北海道夕張地方など、その例は枚挙にいとまがありません。そして戦後を迎えると、疲弊した国土を復興するために石炭産業は獅子奮迅の勢いで生産が進められてきました。

宇部産の石炭の特徴として灰分が多く、その 4 割が灰として外に出ており、また発熱量も少なく、工場の燃料としては使いづらく微粉にして空気に混ぜて焼却していました。

しかし、このような使い方ではたくさんの煤塵(ばいじん)を発生させる要因となりました。そして調査では昭和 26 年には、降下ばいじん量が一月 1 ㎢あたり 55.86t と、「世界一灰の降る町」と話題になるほどでした。その後、市は条例を制定し「宇部市降ばい対策委員会」が設置され、行政、市民、企業、大学の 4 者による連携した対応が進められました。これが後に「宇部方式」いわれる方式です。

煤塵の発生元である企業も対策に本腰を入れ、新しい集塵設備の設置、そして集めた焼却灰を工場で生産するセメントに混ぜ、より凝結力や耐水性のあるものを作り出したりしました。これにより新しい用途に使用されることなり利益を生み、新しい設備の設置に貢献することとなりました。

こうして宇部市内の工場から排出される煤塵は大きく減少してきました。これらの改善には山大医学部の野瀬善勝教授による学術的な研究も大きく貢献し、国際会議の発表では高く評価されることなりました。また野瀬教授の研究は他地域の公害対策にも大きく貢献、その一つが北九州市戸畑地区の八幡製鉄から排出される煤塵、排出ガスによる住民被害の改善活動「青空がほしい」に学術的な側面で大きく貢献しました。

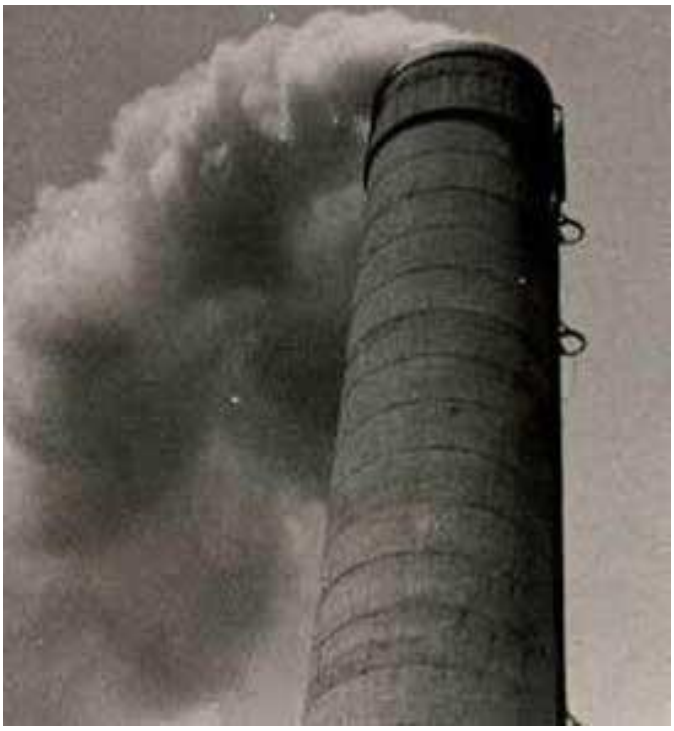
その後、エネルギー転換の時代となり石炭から石油と変わり、石油の燃焼で出てくる亜硫酸ガス対策と移ってきました。それに従い、「宇部市降ばい対策委員会」も「宇部市大気汚染対策委員会」へ改変されました。

これらの継続する公害対策活動に並行する形で、宇部市女性問題対策審議会の発案で美化活動が提唱され、「街を花で埋めよう」と、企業から資金提供を受けて花の種子を市民に提供する緑化運動が進められ、現在も行われている「花壇コンクール」へと発展しました。

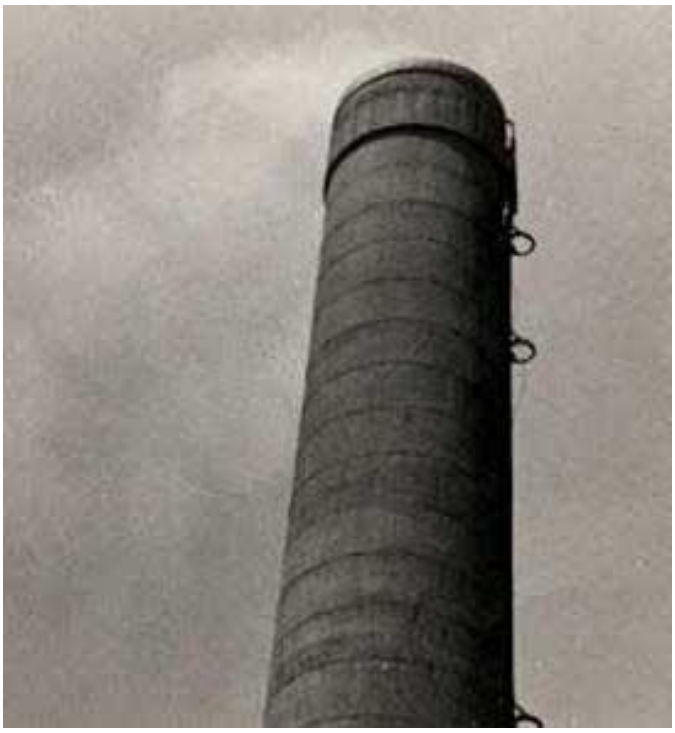
また 1961 年には日本最初の取り組みとして「野外彫刻展」が開催され、現在は国内最大の「現代彫刻展」に発展しました。

このように宇部は大きな問題も無く公害を克服し、住みやすい街づくりを行い今に至っています。

しかし、広く国内を見渡すと宇部の公害克服の過程と同時進行して大きな公害問題を起こし、多くの人たちが苦しみ、そして今も苦しみが続いている所があります。そんな例を水俣に目を向け、宇部の場合と比較し、どこが同じでどこが違い、大きな問題となり多くの人を苦しめていたのかを見てみたいと思います。（次回に続く）



煤煙対策前の工場煙突からの排出



煤煙対策施工後の工場煙突からの排出

（宇部市 HP より）

なお本文及び写真とも宇部市の HP：ダスト・イズ・マネーを参考にしております。

https://www.city.ube.yamaguchi.jp/kurashi/kankyouhozen/kokusaikankyou/1002753/1002755.html

お知らせ

上関原発を建てさせない山口大集会 2025

第 1 回　実行委員会

と　き：2024 年 12 月 15 日（日）

13 時 30 分～15 時

ところ：サンフレッシュ山口　視聴覚室

山口市湯田温泉 5 丁目 5-22

（山口市勤労者総合福祉センター）

上関原発を建てさせない
山口大集会　2025

日時:2025 年 3 月 22 日(土)

10:00～14:00
場所:山口市維新百年記念公園
野外音楽堂
入場無料／雨天決行
メインスピーチ:青木美希さん
福島からのゲスト:
千葉親子（ちばちかこ）さん

青木美希: ジャーナリスト・作家
文春新書
『どうして日本は原発を止められないのか』
新聞社 3 社の記者をし、『警察裏金問題』、『プロメテウスの罠』などで新聞協会賞を取材班で 3 回受賞。
原発取材をライフワークとし、原子力発電所問題を徹底調査のうえまとめた本著が大きな反響を呼ぶ。2024 年第 3 回脱原発文学大賞を受賞した。

千葉親子: 子ども甲状腺がん支援グループ・
あじさいの会　共同代表

♪♪見て、食べて、楽しいマルシェ♪♪♪
(出店募集中)

～編　集　後　記　～

「11 月 21 日、平郡島の住民代表が村岡県知事に中間貯蔵施設に反対、原子力発電所反対の要望書を手渡した」（朝日新聞、11 月 23 日）この記事を読んで平郡（柳井市）、祝島（熊毛郡上関町）を結んで、周辺の市町からさらに全県へと広がると確信しました。宇部から声をあげましょう（編集部 T）

使用済み核燃料の中間貯蔵施設を止め、原発ゼロを実現するために、少し遠回りですが、土台になるテーマを編集しました。
★**前田恵子さん**の戦争と原発をめぐる整理は、戦争準備、軍拡増税が進められているとき、破綻してもしがみつく核燃料サイクルが、結局、核武装の準備であることを論じています。専門家は、原発が「自国民に向けた核弾頭」であることを認識していたとは驚きです。★原発事故は、障がい者・高齢者に犠牲をおしつけるとともに、子どもたちに甲状腺ガンをはじめ様々な形で襲いかかります。それを回避緩和するするために、福島の事故直後から全国で保養活動が行われてきました。長門市油谷で行ってきた**安岡正彦さん**は、コロナ禍の中断を越えるべく、次の展望を熱く語っています。★「宇部の市民運動はなにか独特のものがありますね」とよく言われます。実際はどうなのでしょう。温故知新。石炭とともに発展した歴史と公害克服の「宇部方式」。長く環境問題に関わってきた**西村誠さん**による試論は、その光と影、意義と限界を捉え直すことから、地域に根づいた運動の展開を語っています。
★読後の感想や質問、意見などお待ちしています。（編集部 A）